

1990年代の「ゲイリブ」におけるゲイとレズビアンの差異 ——北海道札幌市における活動を事例に

齊藤巧弥
(北海道大学大学院)

本稿は、1990年代の日本におけるLGBTの社会運動においてゲイとレズビアンが共に活動をする中、どのような差異が両者の間で問題となっていたのかを論じる。分析対象として、北海道札幌市で1989年から2000年代初期にかけて活動をしていた団体“札幌ミーティング”を取り上げる。札幌ミーティングではゲイとレズビアンが共に活動をしていたが、両者の間には差異もあった。ひとつは、新しいコミュニティとしての札幌ミーティングを、コミュニケーションの場として利用することに対する認識の違いであった。もうひとつは、抗議活動と自己の内面に向き合う活動のバランスをめぐる認識の違いであった。これらの差異は両者の対立にもつながり、その背景には、両者の間にあるジェンダーの違いが必ずしもゲイ男性に認識されていたわけではないこと、両者が各自のアイデンティティを重視していたため、このような差異を積極的に共有・議論するに至らなかったという事情があった。

キーワード

ゲイリブ、札幌ミーティング、差異、コミュニティ、アイデンティティ

I. 研究の目的と背景

本稿の目的は、1990年代の日本におけるLGBT¹の運動においてゲイとレズビアンが共に活動をする中で、どのような差異が両者の間で問題となっていたのかを明らかにすることである。具体的な分析対象として、北海道札幌市で1989年から2000年

代初期にかけて活動をしていた団体である“札幌ミーティング”を取り上げる。

昨今は全国各地で同性パートナーシップ制度が制定されたり、議員によるLGBTへの差別発言が波紋を呼ぶなどしている。またテレビドラマにもLGBTが登場するな

1 本稿ではゲイ・レズビアン・バイセクシュアル・トランスジェンダーのみならず、広くセクシュアル・マイノリティを含む用語としてLGBTという語を用いている。

ど、その認知は<LGBTの主流化>とも呼ばれるようになってきている。しかしながら、LGBTを一枚岩で捉えることはできず、それぞれの間にある差異やインターセクショナルな問題に関しては、十分な議論がされているとはまだ言えない。本稿ではゲイとレズビアンとの差異に注目し、それを歴史的に論じることを目指している。

1991年にテレサ・デ・ラウレティス (Teresa de Lauretis) が発表した「クィア・セオリー」(1991=1996) という論文は、ジェンダー、人種、階級などの差異を確実に論じながらも、その差異と共にLGBTが連帯するためのマニフェストであったと言える。その中でジェンダーに関して彼女は<レズビアンとゲイ>という表現に着目し、この表現により両者の間にあるジェンダーの差異が前景化されるよりは排除されていることを指摘した。そしてその差異を認識しつつ連帯することを目指していた。こうしたクィア・スタディーズの視座のひとつである「差異に基づく連帯の志向」(森山 2017: 126) はその後のLGBTの運動と議論に大きな影響を与えた。

しかしながらクィア・スタディーズが日本に輸入された際、クィアの解釈には批判も寄せられた。クィアが「アイデンティティの否定」(清水・クレア 2019: 79) として解釈され、人々の間にある差異の議論が後景化される中、砂川秀樹は「日本においては、まだ、ゲイ/レズビアンをめぐる議論が、その内的差異を顕在化させるほど、十分に行われていない」(砂川 1999: 142)

と指摘する。この指摘は現在においても有効であると思われるし、運動に携わる人々の間でどのような差異が問題となっていたのかを可視化することは、今後の運動においても何かしらの示唆をもたらすと思われる。

日本におけるLGBTの運動に関する研究はまだ乏しいが、昨今いくつかの研究が登場している。例えば新ヶ江章友は日本でのHIV/AIDSの登場に際して、ゲイ男性当事者による運動と国家による介入がゲイ・アイデンティティとコミュニティを形成した過程を論じている(新ヶ江 2013)²。また堀川修平による一連の研究によって、LGBTの運動の歴史が掘り起こされつつあり(堀川 2015, 2016, 2018)、杉浦郁子や飯野由里子の研究によってレズビアン・フェミニズムの歴史も掘り起こされつつある(杉浦 2008, 2017; 飯野 2008)。また運動から離れた文脈では、前川直哉によって、男性同性愛者の<悩み>の歴史が男性性の問題と共に論じられている(前川 2017)。しかしながらいまだに、LGBTの運動における人々の差異については十分に論じられていない。

本稿は1990年代の運動に着目し、上記の課題に取り組む。1990年代に着目する理由は、この時期からゲイとレズビアンが共に活動を始めた(溝口 2015: 110) という意味において、<連帯>の出発点とみなすことができるためである。それ以前からゲイとレズビアンそれぞれの活動自体は存在していたが、両者は互いに関係を持たずに活動をしていたと言える。ゲイ男性の運

2 本稿では“ゲイ男性”という言葉を、広く男性同性愛者・同性愛男性を指し示す言葉として用いる。

動は70年代から80年代の間は散在的かつ短命で（プロジェクトG 1985: 60-1）、レズビアンレズビアンの活動は主にフェミニズムの流れに位置づくレズビアン・フェミニズムの一環であった。だが80年代末からはゲイとレズビアンが共に活動をする動きが〈ゲイリブ〉（ゲイ・リベレーション）の中で登場してくる。1986年3月には東京で“動くゲイとレズビアンレズビアンの会”が結成され、1991年には同性愛者への差別について争った“府中青年の家裁判”を起こした³。1992年には“第一回東京国際レズビアン／ゲイ・フィルム／ビデオ・フェスティバル”が開催された。1994年にはレズビアンライターレズビアンライターの掛札悠子とゲイライターゲイライターの伏見憲明によって、“LOGキャラバン”と称される全国縦断講演が9都市で行われた。また連帯の最も象徴的なイベントとして、1994年には日本で初めて“東京レズビアン・ゲイ・パレード”が開催された⁴。以上のような背景があることから、90年代を取り上げ、この特定の時期にゲイとレズビアンレズビアンの間でいかなる差異が問題となっていたのかを論じていく。

II. 分析対象

分析対象として、北海道札幌市で活動をしていた“札幌ミーティング”（通称）を取

り上げる。札幌ミーティングは1989年2月に“ILGA日本・札幌ミーティング”として結成された団体である⁵。札幌ミーティングを取り上げる理由のひとつは、90年代に設立された多くの団体の中でも、非常に活発であったもののひとつであるためである。種々の活動の中でも代表的なのは、東京に次いで二番目となるLGBTのパレードの開催である。1996年に“レズ・ビ・ゲイプライドマーチ札幌”として開催されたパレードは、札幌ミーティングによって基盤が固められたのち、現在でも有志によって継続的に開催されてきており、2018年までに計18回開催された。こうしたことから札幌ミーティングは、札幌という〈周縁〉にありながらも、90年代当時の活動のある程度代表することのできる団体とすることができる。

二つ目の理由は、ゲイとレズビアンレズビアンが共にひとつの団体において活動をしており、〈連帯〉と言える状況があったためである。掛札悠子は、「日本全国どこ探したってILGA札幌ミーティング……ほどの規模で、レズビアンやバイセクシュアルバイセクシュアルの女性とゲイと一緒に活動しようとしているグループってないのよね」（1994/3: 7）と語っている⁶。この背景には札幌という地域特有の事情もあるだろう。赤杉康伸は、東京で

3 これは“同性愛者”への差別を取り上げた裁判ではあるが、実際に被害を被ったのは男性の同性愛者だけであったことは掛札悠子が指摘している（掛札1991）。

4 以上の出来事は、1997年刊行のクィア・スタディーズ編集委員会編（1997）の「クィア年表」参照。

5 “ILGA日本”は南定四郎によって1984年に東京で設立された団体である。札幌ミーティングはその支部として設立された。団体名は1996年11月24日に“北海道セクシャル・マイノリティ協会 HSA札幌ミーティング”と改称されている。団体としては解散していないものの、2006年8月以降は公式ホームページの更新も行われておらず、活動も休止中である。現在このホームページは削除されている。

6 これ以降の文献注については注8を参照。

はセクシュアリティ別・目的別に団体やコミュニティが棲み分けられているが、札幌などの一定規模の地方都市ではゲイとレズビアン、そしてその他の団体との交流が存在していると指摘する（赤杉 2004）。東京と比べ人口の少ない札幌においては、ゲイとレズビアンが個別で活動をする小規模になりすぎるため、共に活動をせざるを得なかったという事情もあるかもしれないが、それが結果として共に活動をする後押しになっていたのであるとすれば、注目に値する事例となる。東京に移住して女性を対象とした活動を開始した札幌ミーティングの女性メンバーは、「ゲイもビアンもバイセクシャルも一緒になって活動できた札幌ミーティングの楽しさを味わってしまった自分には少々ものたりない感がある」（1998/7: 14）との感想を残している。

しかしこの連帯の中では対立も生じていた。当時のメンバーであった河中優郁子は2003年の段階で過去の札幌ミーティングについて振り返り、「男性会員数を逆転しそうなほど女性会員数の多かった時代もあった当会でも、『ゲイ主導』『女性蔑視』を理由に、多くの女性たちが会を辞め、独自にサークル・イベントを模索していったこともある」（河中 2003: 37）と語っている。また当時札幌ミーティングに所属して

いたゲイとレズビアンのメンバーが対談をした際にも、両者の間で激しい喧嘩が幾度も繰り返されていたことが回顧されている（『Knock on the Rainbow』2018.11.10）。以上の語りが暗示するのは、ゲイとレズビアンの間にあった何かしらの差異の存在によって、両者の間に対立が生み出されていたということである。では具体的にはいかなる差異が問題となっていたのであろうか⁷。

札幌ミーティングの活動を分析するにあたって、団体によって発行されていたニュースレターを中心に扱う。このニュースレターは第1号が1991年9月に発行され、最終号となる第135号が2004年12月に発行されている。各号の平均ページ数は25ページほどであり、内容はイベントや活動の告知・報告のみならず、特集テーマに沿った記事、メンバーによる連載記事・エッセイなど、多様かつ自由な形で構成されている。こうした、意見交換の自由な場として機能していたニュースレター内の言説を読み解くことによって、ゲイとレズビアンの活動を分析していく⁸。

メンバーが残してきた言説や活動記録は幅広いが、本稿では具体的にどのような点に注目をすべきであろうか。LGBTの社会運動は、社会運動の歴史の中では<新しい社会運動>と呼ばれる運動のひとつであ

7 本稿ではゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーに焦点を当てるが、もちろん札幌ミーティングにそれ以外のセクシュアリティを持つメンバーがいなかったわけではない。90年代末からはトランスジェンダーのメンバーも参加している。

8 100、118、132号は入手することができなかったが、それ以外の号は全て参照した。ニュースレターなど札幌ミーティングによる刊行物から引用をする際には、その書誌情報を、年・月・頁の順で示す。例えば1991年9月号の1頁から引用する場合、引用後に（1991/9: 1）と記す。これにあてはまらない場合にはその都度、冊子名などを記載する。

る。それ以前の運動が主に労働運動であったのに対して、〈新しい社会運動〉は〈自己変革〉のための運動ということができ(富永 2017)、また石川准は、『制度変革志向』と共に『自己変革志向』を持ち、「社会制度や社会意識を変えていこうとすると同時に、自分達のアイデンティティやライフスタイルを変えていこうとする集合行為だけが、社会運動である」(石川 1988: 155)と論じる。今回分析対象とする札幌ミーティングが、日本における LGBT の活動が隆盛し始めた時期の団体であることを考慮し、〈新しい社会運動〉の中心的な特徴に着目したい。多少石川の言葉を言い換えるのであれば、広く社会に対して行われる抗議活動などの対外的活動・議論と、主に当事者をターゲットに行われる対内的活動・議論の二つに焦点を当てて分析を進めていく。

Ⅲ. ゲイ男性のアイデンティティとコミュニティ

1. 団体の目的

本節から分析を始めるが、まず団体の目的に触れておきたい。札幌ミーティングの設立時、その目的は「申し合わせ事項」としてごく簡単に定められていた。ニュースレターが発行される前、主にメンバー内部で製作・配布されていた『札幌ミーティング文集』の第1号には、「ゲイの生活にかんする情報を相互に交換するとともに、札幌におけるネットワーク作りを進めることを目的とする」(1990/2: 1)と記されている。設

立当時の札幌ミーティングはゲイ男性4人による団体であったため、目的は彼らに関することに限定されている⁹。団体結成から3年の活動を経た後の1992年6月28日には創立以来初の総会が開催され、詳細な会則が制定された。そこで提示された札幌ミーティングの目的は次の三つである。

- ①同性愛者であることを誇りをもって受け入れ合い、同性愛者の孤立を解消する。
- ②同性愛者を多様な生き方のひとつとして偏見なく許容する社会の実現に努める。
- ③地域の同性愛者に正確で有用な情報、および自分らしく生きる環境を提供する。

(1992/6: 2)

1992年にはレズビアンもメンバーとなったことから、ゲイ男性に限らない同性愛者に対して働きかけをするための目的が制定されている。その後、基本的な文言は変わらないが、“同性愛者”という言葉は1996年には“性的少数者”に変わり、さらには1998年には“セクシャル・マイノリティ”へと変わった。これらの目的に表れているように、札幌ミーティングの目的は、肯定的な情報の発信によって肯定的なアイデンティティと LGBT のコミュニティを形成するという①、③の対内的活動、LGBT に対する差別のない社会を形成

9 その後の会員数の詳細な推移は不明だが、1994年の段階では約50人、ニュースレターの購読者は約120人との記述がある(北海道新聞夕刊 1994.11.21)。

するという②の対外的活動としてまとめることができるだろう。まず前者に注目すると、メンバーがいかなるコミュニティとアイデンティティを形成しようとしていたのかは、ゲイ男性の語りの中にひとつの形をもって表れている。団体初期のメンバーはほとんどがゲイ男性であったため、この点を考察するところから始めたい。

2. 新しいアイデンティティとコミュニティ

当時のゲイ男性のアイデンティティに関しては、アクティヴィストによって“ホモ”という言葉から“ゲイ”という言葉への移行が目指されていたとされている（砂川 2015: 278-82）。より具体的に言うと、「われわれは古い世代の同性愛者と違う」、「かわいそうなホモからハッピーなゲイへ」（石田 2006: 208）という言説が形成されていた。札幌ミーティングのニュースレターを見ても同様の傾向が窺える。しかしこれに加えて注目したいのは、“リブガマ”という言葉である。

“リブガマ”とは、“ゲイリブ”に携わる“オカマ”を略した言葉であり、その当時、ゲイリブに反発するゲイ男性によって蔑称として使用されていた。札幌ミーティング設立メンバーである鈴木賢は90年代当時を振り返り、こう語る。

リブ・ガマというのは、当時はこのしり言葉でした。つまり、クオリティー高く隠れて、異性愛者のふりをして過ごせばいいのに、わざわざ外に出て権利とか平等とか言うのはやめてもらいたい、迷惑である、という反発がすご

く強かったのです。（蔵田編 2017: 19）

こうした批判が、札幌ミーティングに所属していないゲイ男性から札幌ミーティングのゲイ男性へ投げかけられていたことは、ニュースレター内でも語られている。具体的には、「何か具体的な不都合があったかしら?」「あなたたち最近、目立ちすぎだと思うの。なんだかいろんなことをやってるみたいだけど、極力波風立てずにね…」(1995/1: 6) という批判があったと語られている。ゲイリブに批判的なゲイ男性は、ゲイリブは不必要であるとの認識のもと、“リブガマ”という言葉で罵り言葉として使用していたのである。しかしそうしたゲイ男性からの批判に応えるかのように、札幌ミーティングのゲイ男性は“リブガマ”であることを引き受ける姿勢を見せていたことは、ニュースレターの記事内で彼らが自分のことを“リブガマ”と称することからも窺える。例えば、「リブガマ、リブビアンの日」(1996/1: 39-42) と称されたマンガでは、“リブガマ”、“リブビアン”(ゲイリブに携わるレズビアン)としてのメンバーの日常が描かれている。加えて彼らは、“リブガマ”や“ゲイ”の対極に“ホモ”を置き、ゲイ男性の中で明確に性質の違う二者を生み出すことでも、批判に抵抗していた。リブガマは、「政治的に目覚めたオカマ」「無敵状態のオカマ」「リブガマ戦士」(1995/6: 18) というように解説され、政治性と力強さによって脚色されている。対して“ホモ”は、「夜だけの、セックスというフィルターを通してしか理解されない」存在、「ゲイ・プライド……やゲイ・アイデ

ンティティ……を持ち得」ず、「セクシャリティは『ライフ』の問題だという認識がまるでない連中」(1995/6: 18)として対比されるのである。こうして札幌ミーティングのゲイ男性は批判に応答する形で、自分たちではない存在の強調とそこからの差異化によってアイデンティティを形成していた。

こうした言説は、札幌ミーティングがいかなる場所であるべきかという議論とも結びついていた。そのひとつが、札幌ミーティングをハッテン場やゲイバーから差異化させようとするものである¹⁰。

僕たちがセクシャリティを重荷に感じないでいられる場所として、例えばハッテン場とか飲み屋さんがあります。ハッテン場にはハッテン場の楽しみ(?)があり、飲み屋さんには飲み屋さんの楽しさがあります。それはそれで十分に承知しております。ですが札幌ミーティングはそれらが提供し得る楽しさとはもっと違うタイプの楽しさを提供したいと考えます。……セックスだけがゲイ同士のつながりではなく、あるいは深夜の大騒ぎをするだけがゲイとしての楽しさではないんだよ、ということに気づかせてあげたい

のです。……僕たちは「夜」だけではなく、「公園」だけではなくどんなときも、いつでも、どこでも「ゲイ」なのですから。(1993/11: 17)¹¹

この語りには、二つの差異化を見て取れる。ひとつは、クローゼットの空間ではない場として札幌ミーティングを捉えるものであり、“夜”や“公園”というイメージからの離脱を図っている¹²。もうひとつは、セックスや深夜の大騒ぎとは異なる新しい楽しさを提供する場として札幌ミーティングを捉えるものであり、性的なイメージとは異なる“ゲイ”としての新しい楽しさを、札幌ミーティングを通して構築・提供しようとしている。

3. 目的達成のためのジュニアランチ

以上のような“ゲイ”や“リブガマ”としてのアイデンティティを形成し、メンバーの集合性を維持するために、“ランチ制度”とその中の“ジュニアランチ”が重要な役割を果たしていた。札幌ミーティングでは団体内に、会員各自の興味関心にもとづいてランチ(特定の活動テーマを設定した下位組織)が設置されていた。一言で表現するならば、「やりたい人だけでやりたい活動をするための制度」(1994/1: 20)

10 石田によると「ハッテン場」とは、「匿名性のもとで男性同士の性交渉が成立できるような空間」を意味する(石田2019: 208)。公園などの公共の場が利用される<転用>ハッテン場と、宿代や入場料を取る有料の<専用>ハッテン場がある。

11 この語りが掲載されている記事はゲイ雑誌『アドン』における札幌ミーティングの紹介記事の転載と思われるが、具体的な号数などは不明。

12 “夜”のイメージは、ゲイバーに限らず飲み屋が夜に営業すること、性行為が暗い場所で行われることと結びついている。“公園”は、注10でも触れた転用ハッテン場のイメージと結びついている。

である。活動の頻度・内容、継続期間は非常にばらつきがあるものの、確認できるだけでも21のランチが結成されてきた¹³。ランチ制度の機能は、団体として共に行動することではなく、やりたい活動や目的の異なるメンバー各自の意思を尊重し、各自での活動と差異を認めながらメンバーを緩やかに統合することであったと言える。

その中でも“ジュニアランチ”は特別な位置付けがされていた。他のランチは個人が所属したいものを選択していたが、ジュニアランチに限っては、「初めてミーティングに来た人には、ほとんどの場合ジュニアランチに入らせていただいている」（1994/3: 3）と言われる。その理由は、「札幌ミーティングあるいはゲイ・ムーブメントなどについての『ジュニア』が、ゲイ・グループ活動について理解するまでの期間を有意義に過ごすための場を提供することを目的として設置されたランチであった」（1994/3: 3）からである。ジュニアランチには、その趣旨を、「自分らしく生きる！」（1994/8: 10）こと、「別にGayであることを重荷に感じる必要はなくて、人目を気にせず、自然体でいられる場、空間を設けること」（『ジュニアランチ文集1994』: 6）とされるように、自己を肯定

できる空間を作る目的があり、月1回から2回の定例会において、「恋愛」「SEXについて」「老いるということ」「エイズの基礎知識」など種々のテーマを設定して交流をしていた。それに加えて、「僕たちジュニアランチはゲイリブ実践の場」（1995/6: 5）、ジュニアランチは「リブガマ養成の『虎の穴』」（1995/2: 6）と言われるように、“ゲイ”“リブガマ”としての活動をするという目的もあった¹⁴。例えば、ボイスレター（ニュースレターのカセットテープ版のようなもの）の作成がある。そこに収録されているものに、ラジオドラマや、街中の人々に同性愛についてインタビューをする「街角突撃インタビュー」などがある。このようにジュニアランチにおいては、肯定的でありかつ行動的なアイデンティティが形成されていたのである。

こうして、ゲイのメンバーが求める“ゲイ”や“リブガマ”としてのアイデンティティはジュニアランチによって形成が促進されたのち、各種ランチにおいて各自の興味関心にあった活動をすることによって、そのアイデンティティを最良の形で表現できるようになっていたと言える。しかしながらジュニアランチは、確かにゲイ以外のメンバーも参加していたが、メンバー構成がゲイ男性に偏っていたり（94年

13 プロテストランチ（差別的表現を流布させるマスメディアなどへ抗議活動をするランチ）、エイズ救済ランチ（HIV/AIDS 関連の活動を行うランチ）、札幌発「中島みゆき」私設ファンクラブ（中島みゆきに関する記事をニュースレターに寄稿したりするランチ）、LRランチ（高校生のためのランチ）、カトリア会（映画愛好家のためのランチ）などがあった。

14 ジュニアランチは設置（1991年8月）から2年半の間、「その役割をほとんど果たすことなく……単なるお遊び企画部隊に過ぎなかった」（『ジュニアランチ文集1994』: 20）とも回顧されている。ジュニアランチ設置の目的がより強く機能し始めたのは1994年以降であると言える。

の段階でメンバー20人の中で女性は1人だけ(『ジュニアランチ文集1994』:2))、上でも引用した通り「リブガマ養成の『虎の穴』(1995/2:6)と言われたりもするように、主にゲイ男性によって構成されるランチであったとも思われる。

IV. ウィメンズランチによる排他的領域の確保

ランチの中にレズビアンランチが存在したことは、札幌ミーティングないし“ゲイリブ”におけるレズビアン位置付けを物語っている。札幌ミーティング結成から三年後の1992年に初めてレズビアンがメンバーとして参加した。その後すぐ彼女によって札幌ミーティング内に“レズビアンランチ”が結成され、1993年末には新しくリーダーとなったメンバーがバイセクシュアルであったことから“ウィメンズランチ”へと改名された¹⁵。つまり“ゲイランチ”なるものがない一方で“レズビアンランチ”が必要であった背景には、当時の運動がゲイ男性主体に行われていたことを暗示している。

ウィメンズランチは其中で自身のセクシュアリティや女性であることにまつわる基本的な悩みについて話し合うために、1994年から勉強会(ウィメンズスタディ)を開始し、その一環としてコンシャスレイジング(conscious raising、以下CR)も行って¹⁶。1994年3月の時点でウィメンズブ

ランチのメンバーは5人であったが、1997年初期ごろの段階では月二回の定例会に毎回約20名ほどが参加していた(『アニース』1997年春号:144)。彼女たちの言葉を引用すると、CRとは、「意識向上、意識覚醒」を意味し、「女性が女性どうして女性の悩みをききあい、共通点をみいだしたり、励ましあったり、何が問題なのかを一緒に考えたりする」(1994/8:22)活動である。開始当初からCRは女性メンバーのみで行われており、「ウィメンズスタディに男とヘテロが参加できない理由」という記事でその理由が次のように語られている。

私たちはまず、私たちの欲求、苦悩、からだ、性などについて、内なる自分自身の声に耳を傾けなければならない。そして、それらを語るための言葉を、私たちは獲得し、男やヘテロセクシュアルからの借り物ではない、自分たちの言葉で私たち自身をポジティブに受け入れていく作業をしなければならないと思う。そのためには、女性たちが誰にも邪魔されず、誰にも揶揄される事なく話し合える環境を、人工的に作らなければならない。それがウィメンズスタディがクローズである理由である。(1995/3:8)

ゲイのメンバーにとってはジュニアランチや全体の定例会がCRのような機能を

15 ウィメンズランチは1997年末で一旦活動を終了している。

16 ニュースレターで確認できる限り、CRは94年から95年の間には行われていた。また“勉強会”や“CR”という名前は用いられていないが、その後も継続的に“女”や“レズビアン”であることについて学ぶ集会は開かれていた。

持っていたと思われるが、レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーは必ずしもそこでゲイのメンバーと同様の悩みや経験を語ることはできなかったと言える。こうして彼女たちは、ゲイのメンバーと同じ団体に所属しながらも、その中で女性だけの排他的な場を設けることによって、〈女〉であることについて語ることのできる安全圏を形成する必要があったのである。つまり、ゲイのメンバーが〈ゲイ〉としてのアイデンティティを形成しようとしていた中で、レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーは〈女〉としてのアイデンティティを肯定することから活動を始めていたのだ。

札幌ミーティングにおけるレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーの位置付けは、ウィメンズランチが独自に作成していた『かわらばん』という刊行物の存在からも窺うことができる。全何号作成されたかは不明だが、1994年10月の0号（創刊準備号）から（1996/5: 5）、1997年2月の12号まで作成されていたことは確認している。これを作り始めたきっかけは、札幌ミーティングのニュースレターを見た他の女性グループから「ゲイだけのミニコミなら、交換購読はできない」（1996/5: 5）と言われたことであった。また札幌ミーティングの女性メンバーから、「他のレズビアンコミュニティともコンタクトを取りたいから」、「必要とされるのは女性のみ情報という所も多いので」（1994/6: 7）という理

由も語られている。このように、札幌ミーティングの活動がゲイ男性に偏向しているという認識が共有されており、彼女らはその中で〈女〉としての活動を立ち上げることに取り組んでいた。しかしこの〈活動〉をめぐっては、ゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーの間に大きな隔たりも生じていた。

V. 社会への抗議活動

1. 抗議活動の内容

ゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性の差異は、抗議活動に関する言説においてより明確に表れている。対外的活動として札幌ミーティングは様々なイベントを開催してきた。例えば、毎年2月の雪まつりに合わせて『雪まつりフォーラム』と称した講演会を1991年から2002年までの間、毎年開催してきた¹⁷。また、本稿の冒頭でも触れたように、1996年からはLGBTのパレードも開催してきた。それらの中でも、社会への働きかけとしてよりラディカルに行われていたのは、マスメディアやローカルメディア、一般雑誌・書籍などに対する抗議活動である。その中でも特に大きな抗議活動として、UHB（北海道文化放送）とSTV（札幌テレビ放送）への抗議活動がある。

UHBへの抗議活動は、1994年1月頃から約9ヶ月間続いた。1993年12月24日の夕方に放送されたテレビ番組『ポテト年末スペシャル』（年末特番）の中で「気がつけばホモ」という20分弱のコーナーが放送さ

17 具体的には、『ゲイライツ in 札幌』（1992年）、『レズビアンコミュニティ&ゲイコミュニティ』（1994年）、『差別って何さ！'97』（1997年）、『親と子の対話：セクシュアリティと家族』（2000年）などの題目で行われてきた。

れ、札幌ミーティングはその内容を問題視し抗議をした。このコーナーでは「ホモセクシャル度チェック」と称された企画が行われ、偏見に基づいた10の項目（「お化粧品をしたことがある」「前より後ろが好きだ」など）によって個人を「立派なホモ」（10個）、「きっとホモ」（7-9個）、「たぶんホモ」（4-6個）、「もしかしたらホモ」（1-3個）、に振り分けるものであった。この抗議活動は新聞などのメディアによっても取り上げられた。9ヶ月ほどの抗議と交渉を経て1994年9月29日には謝罪放送が行われ、ゲイとレズビアンメンバーも出演し抗議の文章を読み上げた。同年10月15日には札幌ミーティングにファックスで謝罪文が送られてきたことによって、この問題は終結を迎えた。

STVへの抗議活動では、会員制ラジオ番組『うまいっしょクラブ』における「モーホーの見分け方」というコーナーに対して抗議をした。「モーホーの見分け方」はリスナーからの手紙を紹介する不定期のコーナーであり、一年半ほど続いていた（北海道新聞1995.6.20）。リスナーから送られてきた「モーホーの見分け方」をパーソナリティーが茶化すという内容であった。「ひとつひとつの『見分け方』は、ゲイというシンボルに絡みつくセックスモンスターイメージを根拠なく膨らませ」（1995/8:3）と批判されているように、ゲイとセックスが過剰に結びつけられることが問題のひとつとされていた。1995年12月2日にSTVから送られてきた回答書／謝罪状をもって抗議活動は終結している。

いずれの抗議活動においても放送側は放

送内容が差別的であったことを認めようとしなかったため、札幌ミーティングは何度も質問状を送ったりするなど粘り強い交渉をしていた。STV問題の場合は、STV社屋前や札幌駅において抗議のため1000枚のビラ撒きをしたり、STV社屋に向かってシュプレヒコールをしたりした（1995/9:3）。

2. 抗議活動への向き合い方の違い

1) 出会いと集いの場の状態

札幌ミーティングが行ってきた抗議活動の多くはゲイ男性に関するものであった。この背景には、“ゲイ”や“リブガマ”というアイデンティティが＜政治性＞や＜強さ＞と結び付けられていたこと、そしてゲイに対する差別が見えやすい一方でレズビアンに対する差別は不可視であることがあるだろう。異性愛社会においては女性同士の欲望は不可視化されているためにレズビアンという主体も不可視化され、ゲイに対して行われるようなくわかりやすい＜差別＞が存在していない（杉浦2010）。しかしこれらに加えて、レズビアン差別への抗議活動がほとんど行われなかったのは、札幌にレズビアンコミュニティがそれまで存在してこなかったため、その形成がまず取り組むべき課題であったからと言える。レズビアンなど女性メンバーによる社会への働きかけに対しては、レズビアンランチが設立された当初から語られている。1993年2月6日に開催されたレズビアンランチの第一回目のお茶会が、以下のように総括されている。

これは総括として話していたことだけど、やっぱり女性同性愛者、いわゆるレズビアンが社会的に自己主張をはじめから、まだ日が浅いでしょ。だからみんな、まだまだ余裕がないと思うのね。何しろ相手を探すのが大変、っていう段階にいるわけだから、法律がどうの、社会的な扱いがどうのっていう事を考えてる余裕がない。……みんなまで集まって何かしようよ、っていう時、友達が欲しいとか、恋人が欲しいとか、そんな一番身近な事を先に解決していかないと、始まらないよね。……プロテストランチやエイズランチみたいに、社会に働きかけるのは、私達にはまだ早いと思うの。(1993/2: 15)

この語りには、ゲイ男性にはすでに恋人や友人などに出会う環境が存在してきた一方で、レズビアンはまずそうした環境を整える段階にいるということが語られている。商業誌としては初のゲイ雑誌である『薔薇族』は1971年に創刊され、ゲイ男性は文通欄を用いることで他のゲイ男性と交流をしてきたが、レズビアン・バイセクシュアル女性向けの雑誌とされる『フリーネ』は1995年まで待たなければいけなかった。『フリーネ』が第2号で休刊したのち、1996年には『アニース』が創刊されている。だが途中休刊を挟み、2003年までの間に計9

号しか発行されなかった¹⁸。

また札幌にゲイバーは1970年代にはすでに13・14軒ほどあり(伏見2004: 325)、1995年には20軒が営業をしていた(『全国男街マップ'95年版』1995: 4-7)。一方でレズビアン・バイセクシュアル女性向けの「道内唯一」の「レディースバー」は90年代末になって開店したと語られている(2000/1: 19)。対して東京の場合は90年代には8軒ほどがあり、2000年代に入っても10軒前後のバーが存在している¹⁹。またバーのみならず東京にはレズビアン・フェミニズムの団体も80年代から存在してきたが、札幌ではそうした団体は一切なかった。こうした状況において札幌のレズビアン・バイセクシュアル女性は、〈一番身近な事〉を解決する交流の場を札幌ミーティングに求めていたのである。

2) 〈運動〉と〈内面〉のバランス

しかしながら札幌ミーティングといった運動団体に所属するからには、社会に対しての働きかけや抗議活動との関わりも彼女らは考えなければいけなかった。事実、そうした活動もしてきた。しかし、ウィメンズランチのメンバー4人による座談会記事において、参加した2人は運動について次のように語っている。

レズビアンはレズビアンである前に女性であるわけで、大変だとは思うの

18 『薔薇族』(1971年創刊)、『アドン』(1974年創刊)、『サムソン』(1982年創刊)、『パディ』(1993年創刊)などのゲイ雑誌は、それぞれ数百号がこれまでに発行されている。

19 ここで参照したのは『アニース』の1996秋号、1997春号、1997夏号、1997冬号、2001夏号、2002夏号、2002冬号、2003冬号である。創刊号(1996年6月発行)のみ参照できていない。

ね。でも、活動とかやっちゃうと自分の弱さとかさらすの、なかなかできないと思うのね。自分になるべくさらそうと思っているんだけど。(1996/1: 48)

運動って二本立てじゃないとだめだと思ふのね。外への活動、抗議活動とか、外への表現も大事なんだけど、内面の面ももう一度見直していくっていうかさー、仲間うちで自分の悩みとか話してみたり……そういうの両方平行にいかないと、かたっぽだけだと、バランスとれないと思う。(1996/1: 48)

この語りからは次のことがわかる。対外的活動（外への抗議活動）と対内的活動（内面）のバランスの必要性を認識しつつも、対外的活動をすることが＜弱さ＞を覆い隠してしまうという認識である。同じ座談会で別のメンバーが、「グループとかやって、運動とかやってはた目では強くなったように見えるんだけど、ただ単によりかかっているだけだから強くなっていないのよね」(1996/1: 48) とも言うように、対外的活動によって形成できる＜強さ＞とは、偽りの強さとしてみなされている。活動することで「内面のホモフォビアから目を背けちゃう」(1996/1: 48) ことを危惧し、「ミーティングって、傷のなめあいじゃなくて、傷の広げあいじゃない？ (笑)」(1996/1: 48) と語るメンバーの語りからも、彼女らにとっての本当の＜強さ＞とは、自分の＜弱さ＞を克服することからくるのではなく、それを引き受けることからくると言える。

ゲイのメンバーも自己の内にあるホモ

フォビアや＜弱さ＞に向かい合うことは重要なことであり、それはジュニアランチや団体全体の定例会によって行われていたと思われる。しかし彼らの場合は、“ゲイ”や“リブガマ”とは異なる他者として“ホモ”を対置させ、否定的な男性同性愛者のイメージをそこに放擲することによっても＜弱さ＞を克服していたと言える。つまり、性質の異なる男性同性愛者の二項対立を維持することによって＜弱さ＞を切り離し、＜強さ＞を手に入れていたとも言えるのだ。言い換えるとそれは、＜弱さ＞を引き受けるというよりは、遠ざけるための戦略でもあった。レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーが同様の戦略をとらずに＜弱さ＞を引き受けようとしていたことも、男性メンバーと女性メンバーの間に対外的活動に関する認識の差異を生む原因となっていたと思われる。

こうして対外的活動と対内的活動のバランスを彼女らは重視していたが、しかしながら活動の比重が内面に偏ってしまっていたことは、ウイメンズランチが一度解散した後、当時の活動を振り返る記事において次のように語られていることから窺うことができる。

当時のウイメンズ^(ママ)は、リブを活動の主目的とする札幌ミーティングの中では少々異色の存在で（宴会が多かったかな…）、「リブ意識が低い」と、他のメンバーだけでなく、ウイメンズ内部^(ママ)のメンバーからも問題提起されることがしばしばあった。(1998/7: 14)

そしてその背景については次のように続けて語られる。

言い訳になってしまうかもしれないが、それにはいくつかの理由があった。ゲイの人達には、情報雑誌、ハッテン場、お店など、沢山のコミュニケーションの機会があるが、女性にはそういう環境も、また、それを知る術もほとんど無い。当時は、そんな中で、やっと創刊された情報雑誌のお陰で、ようやく^(ママ)ウイメンズに人が集まり始めたところだった。ウイメンズは、^(ママ)コミュニケーションに飢えた女性達にとって「やっと見つけた憩いの場所」だったのである。(1998/7: 14)

すでに紹介した『フリーネ』や『アニス』では札幌ミーティングの紹介も掲載されており、そこで団体のことを知った女性たちの参加が増加した。確かに先ほどの語りでは対外的活動と対内的活動のバランスが必要とされていたが、多くの女性にとって「やっと見つけた憩いの場所」でもあった札幌ミーティングで、彼女らの活動はコミュニケーションに重点が置かれるようになったことは必然でもあった。ゲイのメンバーは札幌ミーティングという場をゲイバーやハッテン場から差異化しようとしていたが、レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーはゲイのメンバーのようにコミュニティの機能分担をしてはいなかったのだ。

VI. 考察

ゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーは同じ団体に所属し共に活動をしながらも、活動内容の隔たりを抱えていた。その理由は、<男><女>として両者が置かれている社会的状況が異なっていたため、そして自身のジェンダーに対する意識や取り組み方が異なっていたためであった。より具体的には、次の二点である。ひとつは既存のコミュニティの違いである。ゲイ男性にはゲイバーやハッテン場といった場がすでにあっただが、レズビアン・バイセクシュアル女性のそうした場はなく、彼女らは出会いやコミュニケーションを求めている。そのため札幌ミーティングに求めるものが両者で異なり、対内的活動と対外的活動のバランスをめぐる意識の差が生じていた。札幌ミーティングのゲイ男性がゲイバーやハッテン場といった既存のコミュニティを否定できるほどにそれらが<成熟>していた背景には、ゲイ男性も<男>であるため経済的余裕があること、夜間の交遊が許容されていること、そして性的欲望の存在が認識されやすいことがある。対してレズビアン・バイセクシュアル女性には、ゲイ男性が<男>として持つ特権が与えられておらず、欲望の存在も不可視にされてきた。

そして二つ目は、<弱さ>と<強さ>の捉え方の違いである。ゲイ男性は自身の<弱さ>に向き合うことで<強さ>を得ると同時に、同性愛者の否定的側面を担わされた<ホモ>という存在を維持することによっても<弱さ>を克服していた。これは、抗議活動などの対外的活動への原動力

となっていたとも思われる。対してレズビアン・バイセクシュアル女性はCRなどを通して〈女〉としての問題に取り組むこと、〈弱さ〉に向き合うことをより重視していた。そして彼女らにとって〈弱さ〉は克服されるものというよりは、引き受けるものであった。彼ら／彼女らは確かに社会におけるマイノリティとしてのアイデンティティを引き受けようとしていたが、ゲイ男性はその位置付けを引き受けながらも、〈男〉としての〈強さ〉を求めてしまうという側面もあったのではないだろうか。

以上のような差異は、レズビアン・バイセクシュアル女性の言説により表出している傾向がある。その背景には、彼女らが、ゲイ男性が主なメンバーであった札幌ミーティングに後から参加したという事情もあったと思われる。彼女らは常にゲイ男性による活動を基準に自らの活動について考えなければならず、それが結果として両者の差異を認知するきっかけとなった。またゲイ男性の言説を見ると、新しいアイデンティティやコミュニティ形成にあたって参照軸となるのは、ゲイリブに批判的なゲイ男性と、既存のコミュニティであった。対してレズビアン・バイセクシュアル女性は、ほとんどゼロからアイデンティティとコミュニティを形成しようとしており、他のレズビアンが参照軸とはなりにくかった。この背景は、ゲイリブ隆盛期の90年代に特有のものであると思われる。

このようなゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性の関係性は、札幌ミーティングに限らず、広く当時の運動の中において

存在していた傾向であると思われる。しかし2節でも触れたように、おそらく人口的な要因からも両者が共に活動することが促された地方都市としての札幌においては、その差異がよりレズビアン・バイセクシュアル女性にとって認識されやすかったのではないだろうか。

ジェンダーの話題はもちろん札幌ミーティングにおいても扱われていたし、ニュースレターにもジェンダーに関する記事が存在している。また“ゲイリブ”とは、「自分をねじ曲げて生きることを拒否し、『異性愛=正常』とする社会の方に疑問を投げかけ、この常識をつきくずしていくあれこれの地道な試みのこと」(1995/2: 11-2)であり、異性愛規範によって抑圧を受けるすべての人のための活動であったということが出来る。しかしながら、必ずしも〈すべての人の活動〉という意図が共有されていたとは言えない。

ぼくにはぼくのための闘いしか戦えないし、他人の代理になって他人のための闘いを戦うことには、確かに無理がある。ゲイリブは自分のためにするもので、他人のためにするものじゃない。……もう一度、はっきりさせよう。自分は自分の闘いを戦う。あなたも自分で戦いましょう！そしたら、はじめて共同戦線の可能性が生まれる。(1998/6: 17)

こうした語りにあるような自分のための活動をするという姿勢は、彼ら／彼女らの活動が〈連帯〉の中にもありながらも、“ゲ

イ”や“レズビアン”というアイデンティティを軸にしたアイデンティティポリティクスとしての側面が強かったことを示している。この語りでは自分と他人が異なる問題を抱えていることは認識されており、ゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーの間にも差異があることは少なからず認識されていたと思われる。だが自身のアイデンティティの形成が何よりも重要であったため、具体的にどのような差異が存在しているのかということまでは積極的に共有し、踏み込んだ議論をしていたとは言えない。そのため、互いが自身に特化した活動をするにより、時に利害が衝突することがあったのである。

VII. 結語

本稿では札幌ミーティングを事例に、LGBTの運動初期におけるゲイとレズビアンとの差異をジェンダーの視点に注目して分析をした。しかし今回は運動において生じていた差異を析出することに焦点を置いたため、今後はより連帯の側面に焦点を当てて考察を進めることが課題のひとつである。また90年代の他地域の活動や、昨今のLGBTという語のもとで行われる種々の運動の中でいかに差異についての議論が行われているのか（いたのか）、それを具体的な活動に即して分析することも必要であろう。

昨今は人権の分野においてLGBTに代わってSOGI (sexual orientation, gender

identity) という言葉が用いられはじめている。この背景には、ゲイ・レズビアン・バイセクシュアル・トランスジェンダーといったアイデンティティが西洋近代社会に特有のもので、その他の地域では必ずしも共有されているアイデンティティではないこと、そしてLGBTからはこぼれ落ちる多くのセクシュアル・マイノリティが存在するといった事実がある（石田 2019: 248-9）。こうした問題点を解消するためには確かにSOGIという言葉は有効性を持ち、また特定のアイデンティティを表さないため本稿で見たようなゲイとレズビアンを連帯させるためのきっかけともなるだろう。さらにはアライ（当事者ではないが、LGBTの運動を積極的に支援する者・団体）の積極的な参加も促しうる。しかし昨今は、アライとLGBTの間で軋轢が生じることもある。2018年9月1日には北海道で、既存のLGBT関連4団体によって“北海道LGBTネットワーク”が結成された。その際、市内各地で配布され、またSNS上でも画像で拡散されたチラシには、「LGBT当事者の視点を大切に、これからも活動していきます」²⁰と記されている。その中で「LGBT当事者」の箇所だけ色が変わえられ、当事者性が強調されている。確かに両者に違いはあるだろうが、これによってLGBTが一枚岩ではないことや、LGBTとアライの間で共有できる問題は無視されてしまう。例えば、レズビアンが異性愛の女性と共有できる女性としての問題については後景化してしまう。様々な

20 チラシは、北海道LGBTネットワークの公式Twitterアカウントによるツイート（2018年10月4日投稿）に掲載されている（2019年7月13日取得、<https://twitter.com/hokkaidolgbtnet/status/1047768534632214529>）。

差異を認識しつつ、いかにして連帯をして けるべき課題である。
いくのかという点は、今後継続して論じら

謝辞

本稿は、鈴木賢氏（明治大学教授、北海道大学名誉教授）による資料の提供によって可能となったものである。ここに感謝を述べる。

参考文献

- 赤杉康伸, 2004, 「ゲイ・コミュニティにおける東京一極集中主義、異物排除の構造的性——生きることは『病』なのか?」『情況 第三期』（情況出版）5号1巻：pp.238-44.
- 『アニース』「ANISE AVENUE サークル ミニコミ」1997年春号：pp.144-9.
- de Lauretis, Teresa, 1991, “Queer Theory: Lesbian and Gay Sexualities: An Introduction”, *Differences*, 3(2): pp.iii-xi. (大脇美智子訳, 1996, 「クィア・セオリー：レズビアン／ゲイ・セクシュアリティ」『ユリイカ』（青土社）28巻13号：pp.66-77).
- 伏見憲明, 2004, 『ゲイという〔経験〕——増補版』ポット出版.
- 『北海道新聞（夕刊）』「理解されてる？同性愛 『偏見なくせ』動き盛ん」1994.11.21.
- 『北海道新聞』「同性愛者団体 STVに抗議 ラジオで差別的内容」1995.6.20.
- 堀川修平, 2015, 「日本のセクシュアル・マイノリティ運動の変遷からみる運動の今日的課題——デモとしての『パレード』から祭りとしての『パレード』へ」『女性学』（日本女性学会）23巻：pp.64-85.
- . 2016, 「日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉における『学習会』活動の役割とその限界——南定四郎による〈運動〉の初期の理論に着目して」『ジェンダー史学』（ジェンダー史学会）12巻：pp.51-67.
- . 2018, 「セクシュアル・マイノリティ運動論における《デモ/祭》枠組みの再考——砂川秀樹による『00年パレード』の理論に着目して」『部落解放研究』（広島部落解放研究所）24巻：pp.111-31.
- 飯野由里子, 2008, 『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』生活書院.
- 石田仁, 2006, 「戦後日本における『男が好きな男』の言説史——雑誌記事にみる表象とそれを支える解釈枠組みの変容」（中央大学大学院文学研究科博士論文）.
- . 2019, 『はじめて学ぶLGBT——基礎からトレンドまで』ナツメ社.
- 石川准, 1988, 「社会運動の戦略的ディレンマ——制度変革と自己変革の狭間で」『社会学評論』（日本社会学会）39巻2号：pp.153-67.
- 掛札悠子, 1991, 「ゲイ差別とレズビアン差別は同じものか——府中裁判へのレズビアン視点」『インパクション』（インパクト出版会）71巻：pp.98-104.
- 河中優郁子, 2003, 「レズビアン三都物語——札幌」『にじ』（にじ書房）2巻6号：pp.36-8.
- 『Knock on the Rainbow』, STVラジオ, 2018.11.10放送.
- クィア・スタディーズ編集委員会編, 1997, 『クィア・スタディーズ'97』七つ森書館.
- 蔵田伸雄編, 2017, 『シティズンシップと市民運動——LGBTをとりまく日本的事情』北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター.
- 前川直哉, 2017, 『〈男性同性愛者〉の社会史——アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』作品社.

- 溝口彰子, 2015, 『BL進化論——ボーイズラブが社会を動かす』太田出版.
- 森山至貴, 2017, 『LGBTを読みとく——クィア・スタディーズ入門』筑摩書房.
- プロジェクトG, 1985, 『オトコノコのためのボーイフレンド——ゲイ・ハンドブック』少年社.
- 清水晶子／マリィ・クレア, 2019, 「ジュディス・バトラーを〈翻訳〉する」『現代思想』(青土社) 47巻3号: pp.73-86.
- 新ヶ江章友, 2013, 『日本の「ゲイ」とエイズ——コミュニティ・国家・アイデンティティ』青弓社.
- 杉浦郁子, 2008, 「日本におけるレズビアン・フェミニズムの活動——1970年代後半の黎明期における」『ジェンダー研究』(東海ジェンダー研究所) 11巻: pp.143-70.
- . 2010, 「レズビアンへの欲望／主体／排除を不可視にする社会について——現代日本におけるレズビアン差別の特徴と現状」好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』明石出版: pp.55-91.
- . 2017, 「日本におけるレズビアン・ミニコミ誌の言説分析——1970年代から1980年代前半まで」『和光大学現代人間学部紀要』(和光大学現代人間学部) 10巻: pp.159-78.
- 砂川秀樹, 1999, 「日本のゲイ／レズビアン・スタディーズ」伏見憲明編『QUEER JAPAN Vol.1 —— メール・ボディ』勁草書房: pp.135-53.
- . 2015, 『新宿二丁目の文化人類学——ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』太郎次郎社エディタス.
- 富永京子, 2017, 「社会運動」友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編『社会学の力——最重要概念・命題集』有斐閣: pp.128-31.
- 『全国男街マップ'95年版』, 1995, 海鳴館.

(掲載決定日: 2019年5月29日)

Abstract

Differences between Gays and Lesbians in the 1990s Japanese Gay Liberation Movement: Analysis of an Activist Organization in Sapporo, Hokkaido

Takuya Saito

This paper examines the differences between gays and lesbians in Japanese LGBT activism in the 1990s, when they started working cooperatively. I analyze *Sapporo Meeting*, an activist organization in Sapporo, Hokkaido, founded in 1989 and was active until the early 2000s. While gays and lesbians worked together in *Sapporo Meeting*, they also experienced some struggles. One involved a conflict over whether it was acceptable to seek nothing but communication with other people in *Sapporo Meeting*. The other involved disagreements over the balance of activities directed towards society, such as antidiscrimination protests, and those dealing with the inner self, such as internalized homophobia and mental strength/weakness. The reasons for these conflicts were that gay men were relatively unaware of their masculinity while their lesbian counterparts were aware of gender issues and their own femininity. Also, the organization's gay and lesbian members had their own problems and identity issues, which prevented them from sharing their diverse experiences with others.

Keywords

gay liberation, *Sapporo Meeting*, difference, community, identity